

心癒やすアフリカの大地

アニマルフォトグラファー
トラベルライター

平 岩 雅 代

新聞報道で凶悪な犯罪や犯人の若年化が伝えられるたび、心の荒廃を感じないわけにはゆきません。

便利さに慣れ、物質的に恵まれるうちに人々は更なる欲望をエスカレートさせ、我慢すること、辛抱することをいつしか忘れてしまったのでしょうか。その結果、自分の欲求を満たすために短絡的な犯行に走ることになるのです。

私は1977年に初めてアフリカ大陸を訪れて以来、赤道直下のケニアとタンザニアを中心に、雄大な自然と野生動物を撮影する旅を、これまでに100余回続けています。

24時間営業のコンビニンスストアもなく、自動販売機もなく、首都ナイロビを離れますと電気は自家発電という大自然のまっただなかに建つホテルやロッジに滞在する毎日は、便利さに慣れきった(文明に毒された)日本人に、大切なものを思い起こさせてくれます。

特に生まれた時から当たり前のようにテレビがあり、テレビゲーム、パソコン、携帯電話を手離せない生活を送ってきた現代っ子にとって、ないない尽くしのアフリカでの体験は、とても新鮮なものとして受けとめられます。というよりも、大きなカルチャ

ーショックなのです。

日本での暮らしを振り返ってみますと、街にはさまざまな音が洪水のように私たちに襲いかかってきます。駅のアナウンス、発車ベルの音、ビルの中ではBGM、人々の話し声、道路では車の騒音、工事の音等々…。現代の日本では、完全な静寂を保とうとするならば、防音装置を完備したシェルターの中に閉じ籠らない限りは、とても難しい状態です。

いわば溢れ出る音の洪水の中で、生活しているのが現状です。

音だけでなく、光の洪水も都会の夜の宿命です。高層ビルに灯る明り、各種看板のネオンサイン、車のヘッドライトが深夜でも消えることなく、星空を見づらくなる原因を作っています。



写真1 青空と白い雲の自然の中に建てられたロッジは“自家発電”

ところが、ひとたびケニアやタンザニアのサバンナ(大草原)に足を踏み入れますと、耳に入って来る音は、自然の心地良い音ばかり。小鳥のさえずり、動物の鳴き声、草や木々の葉がさやさやと鳴る音など、まったく邪魔になりません。

日没後は漆黒の闇が支配します。ホテル、ロジの客室やロビー、ダイニングルームには自家発電の明りが灯りますが、空を見上げますと、星明かり、月明かり以外の光は何ひとつありません。

日本に暮らし、星空を忘れかけている人にとって、赤道直下のアフリカで見上げる満天の星は、夢のようです。しばらく空を眺めていますと、流れ星がひとつ、ふたつ、みつつ、と次から次へと流れます。夜が更けるのも忘れ、天の川までもが肉眼ではっきりと見える美しい夜空に魅せられてしまう人も少なくありません。

サバンナの朝は、東の空を赤く染める太陽とともに始まります。赤道直下とはいえ、海拔が 1,500 メートル以上あり、朝の気温は摂氏 10 度近くまで下がります。セーターやジャンパーを着て熱いコーヒーや紅茶を



写真2 檻も柵もないサバンナで野生動物との出会いに使うサファリカー

飲み、早朝のサバンナを車で走りますと、目覚めたばかりの動物たちとの出会いがあります。朝日を浴びて白い牙がまぶしく光るアフリカゾウの群れや、あごひげが光るヌー、夢中で草を食べるシマウマ、目覚めたばかりのライオンなど、どの動物も生命の躍動感に満ちあふれています。

私たち人間が野生動物に出会うのは、国が指定したナショナルパーク(国立公園)や、ナショナルリザーブ(国立保護区)が中心ですが、いずれの地域にも檻や柵は一切なく、野生動物は誰からも餌を与えられません。草食獣は草や葉を、肉食獣は自力で獲物を狩り、文字通り大自然の営みの中で生きているのです。

人間は“車”(サファリカー)という檻に入り、自由に歩き回る野生動物たちの中にお邪魔し、彼らの暮らしぶりを拝見させていただくのです。

真剣に生きる野生動物、愛情いっぱいの親子の姿を見ていると、自然の厳しさ、美しさ、優しさを教えられます。そして自然の恵みに感謝し、自然環境をこれ以上破壊せず、私たち人間が野生動物と共存し、かけがえない自然を次の世代に伝えていかなければ…と痛切に感じるようになります。

環境問題が取り沙汰されている昨今、消費一方の生活ではなく、限りある資源をできるだけ保ちながら環境破壊を少しでも食い止める生活を、アフリカの自然の中で学び、ひとりでも多くの人たちに伝え、心穏やかに暮すことの喜びを伝えたい、と考える昨今です。